

## 書評：『ヒッピー世代の先覚者たち：対抗文化とアメリカの伝統』

編著者：中山悟視  
出版社：小鳥遊書房  
出版年：2019年10月15日  
総ページ数：328頁

評者：菊池哲彦  
(社会部門 准教授)

監督であるクエンティン・タランティーノ（1963年3月生）自身のハリウッドの記憶がエンタテインメントとして結晶した映画『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』のヒットによって、2019年後半には「ヒッピー文化」に注目が集まった。チャールズ・マンソン事件やヒッピー・ファッションといった作品の舞台となった1969年当時の風俗が話題となったが、この作品の根底には、ヒッピー文化の出現に象徴されるアメリカ社会の急激な変化と、それに対峙する文化的保守層の挫折・抵抗・適応という文化の政治学がテーマとして流れているようにもみえる。

1960年代後半から70年代にかけてのアメリカで存在感を放った（そしてかたちを変えながら世界中に広がっていった）ヒッピー文化の源泉を、アメリカ文学を中心としたアメリカ文化の歴史に遡って検討していくのが本書『ヒッピー世代の先覚者たち』である。ヒッピー文化はアメリカの歴史の一時期に華々しく現れて消え去っていった徒花ではない。国家として独立した1776年から現在に至るアメリカの歴史は、主流の文化とそれに異議を唱える対抗文化との衝突と適応の歴史でもある。本書は、ヒッピー文化とその担い手を参照点として、アメリカ文化を対抗文化史として描き出そうとする諸論考によって構成される論文集である。歴史的に先行する（そしてのちに出現した）対抗文化に現れている「ヒッピー文化的なもの」を検討することによって、現在では——タランティーノの映画の受容がそうであったように——風俗的サブカルチャーに矮小化されてしまっている感が拭えない「ヒッピー文化」を、アメリカの対抗文化の歴史の中に位置付け、その文化的可能性を示そうする。

本書は、序章、7章からなる第Ⅰ部、5章からなる第Ⅱ部、そして独立した論考となっている終章から構成されている。序章では、ヒッピー文化をアメリカの対抗文化史の中に位置付けることの現代的意義が示される。

「反逆と文学、反逆の文学」と題された第Ⅰ部では、ヒッピー世代に先行するアメリカの作家たちが示すヒッピー文化へとつながる対抗性が7本の論考によって検討される。そこでは、かれらの思想の中の対抗性が指摘されるだけでなく、その対抗性が社会的文化的背景の中で（体制への接近を含め）どのように受け容れられていったかという点も検討される。第1章では、ヒッピー世代に影響を与えた1950年代のビート世代の作家ジャック・ケルアックの19世紀半ばのアメリカン・ルネサンスに属するヘンリー・デイヴィッド・ソローに対する共感が詳細に分析され、第2章では、ヒッピーとラルフ・ワルド・エマソンとの共振点が、エマソンの信仰における反権威主義の立場から指摘される。第3章では、アメリカ文学のアウトサイダーとされていたエドガー・アラン・ポーの文学が、ヨーロッパにおける評価を通してアメリカ文学の正史に位置付けられていく受容過程が示される。第4章は、先行する世代に対するアーネスト・

ヘミングウェイの対抗的側面と、その彼が正統的アメリカ文学史に位置付けられる過程とを示すとともに、第二次大戦下での彼が反戦作家であるとともに戦争協力作家でもあった二重性が指摘される。第5章では、主流の文化に対してその内部で対抗する可能性を模索する「偶発的な出会い」というヘンリー・ミラーの試みが検討され、第6章では、従来は対抗文化史の中に位置付けられてこなかったウィリアム・サローヤンの対抗性が、彼のケルアックやヒッピーへの影響から示される。そして、第7章では、カート・ヴォネガット文学の中の「笑い」に注目して、その対抗文化やヒッピー文化との結び付きが示される。

第Ⅱ部「抵抗とメディア、抵抗のメディア」に収められた五つの論考は、文学だけでなく音楽や映画、思想を含めた20世紀のアメリカ文化が、ヒッピー文化やヒッピー的対抗性とどのような関係にあるのかを検討していく。第8章は、ヒッピー文化を象徴する野外ロック・フェスティバルに関与したウッドストック世代と、かれらが影響を受けた先行するミュージシャンの対抗性と体制性が示される。第9章では、1950年代のアメリカのポピュラー音楽文化において一時代を築いたエルヴィス・プレスリーの体制性と対抗性が検討される。第10章は、1950年代のハリウッド映画における恐怖・不安の表現を、冷戦という政治状況とヴェトナム帰還兵に対する精神外科手術をめぐる政治文化の問題として検討する。第11章は、1960年代に興ったソロー・リバイバルをソローのメディア受容史として検討し、彼の思想がヒッピー的精神にどのように引き継がれたのかを示す。そして第12章では、19世紀に発生した奴隷反乱事件の指導者ナット・ターナーの人物像が、ウィリアム・スタイロンの1967年の小説『ナット・ターナーの告白』を経て、複雑に表象され受容されていった文化政治的過程が検討される。

「継承されるヒッピー文化」という見出しが付された終章は、ヒッピー文化が21世紀にどう引き継がれ(う)るのかを、小説という文学形式の可能性をテーマとした現代アメリカ小説から示す。

以上のような内容を持つ諸論考によって構成される本書は、何のためにヒッピー文化を問題にするのか。それは、もちろん、ヒッピー文化の細部についての趣味的な蘊蓄を開陳するためではない。本書の企図は、「現在の保守化が進む時代に、リベラルな傾向を強めていた過去の時代を顧みることは、今後のアメリカのあり様、さらには世界の情勢を考える上でも、非常に重要なことではないだろうか」(11頁)という序章の一文に簡潔に表されている。アメリカ社会において、保守的文化に対するリベラルな対抗が力を発揮した時代の文化としてヒッピー文化を捉える。それは、アメリカ社会や世界全体が保守化傾向を強めている現在だからこそ、文化の持つ力について考えるためにも必要な、アクチュアルな人文社会科学的試みなのである。

評者は以上のような本書の企図を高く評価するが、それでも本書に対する疑問がないわけではない。本書に収録された各論考は、先行する(あるいは後継的な)対抗文化をテーマに、それとヒッピー文化との関係を論じているが、ヒッピー文化を直接論じる論考は本書の中に不在である。また、各論考におけるヒッピー文化の意味も微妙に異なっている。そのために、それぞれの論考の議論を興味深く読むことはできるが、「対抗文化としてのヒッピー文化の可能性を問う」という本書全体のねらいが拡散してしまっている印象を持ってしまう。ようするに、中心的テーマであるはずの「ヒッピー文化」が「空虚な中心」になってしまっているのだ。本書の序章でヒッピー文化は「どの世代とも異なる唯一無二の存在などではなかった」(10頁)対抗文化の一亜種として捉えられている。しかし、終章において、ヒッピー世代の感性が「単

なる回帰とは異なる反復性」(315頁)として捉えられているように、ヒッピー文化はアメリカにおける対抗文化の歴史的伝統に連なっているが、対抗文化として唯一無二の固有性をも持っている。だからこそ、60年代のヒッピー文化そのものが、本書で論じられているそれぞれの先覚的対抗文化とのあいだの「差異と反復」とともに明らかにされなければならなかったのではないか。

メディア文化論を専門とする評者の個人的見解では、アメリカ対抗文化史におけるヒッピー文化の固有性の重要な一様相として、テクノロジーとの結び付きが考えられる。対抗文化とテクノロジーとの結び付きは、終章においてアメリカ現代文学のテーマとの関連でふれられているが、それ自体が直接検討されるわけではない。この点を積極的に論じたのが、2011年に刊行された池田純一の『ウェブ×ソーシャル×アメリカ：〈全球時代〉の構想力』(講談社現代新書)である。池田書は、シリコンヴァレー発のコンピュータやインターネットの文化とヒッピー文化の結び付き、そしてその根底にあるアメリカ的想像力の源泉を、19世紀の新興国時代まで遡ってコンパクトにまとめている。そこで強調されていたのが、アメリカ的想像力を支える対抗文化的側面であった。この点は、ヒッピー文化をアメリカの対抗文化史の中に位置付ける本書の主旨とも重なる。

ヒッピー文化は、アメリカ西海岸で生まれたパーソナル・コンピュータの思想、そしてケネディ大統領が打ち出したアポロ計画と同時代的現象である。しかし、それらの関係は同時代性だけではない。ヒッピー文化が目指した個人の解放と個人の意識の拡大は、個人の能力の解放するとともに拡張するテクノロジーとしてのパーソナル・コンピュータの思想を支えていたし、その後の相互接続されたパーソナル・コンピュータ(すなわちインターネット)による諸個人の新たなつながりへの想像にも引き継がれている。また、ヒッピーたちのDIYやコミュニケーション活動の情報源となった『ホール・アース・カタログ』誌の編集長スチュアート・ブランドは、NASAの宇宙開発テクノロジーを、国家が独占するのではなく、人びとが自由に活用することを提唱する運動を展開していた(その成果がNASA提供による宇宙に浮かぶ地球の写真が使われた同誌創刊号の表紙だ)。

しかし、オバマ前大統領のリベラル政権下で書かれた池田書は、保守化が進行する現在読み返すと、シリコン・ヴァレー文化の対抗文化性を理想化しすぎている感がある。新自由主義化が進むグローバル経済において、巨大独占企業群としてのGAFAsの支配が対抗文化的テクノロジーとして創造/想像されたインターネットに支えられている現状を、池田書の視点から批判的に捉えうるかは疑問が残る。対抗文化と結び付いていたテクノロジーに支えられて保守化・新自由主義化が進行している現在だからこそ、「対抗文化としてのヒッピー文化」という論点はもっと活発に議論されなければならない。だからこそ、「ヒッピー文化の対抗文化としての可能性を問う」という本書の問題提起は重要なのである。

性的マイノリティのレインボー運動やブラック・ライヴズ・マター運動などに明らかなように、対抗文化は、現在のアメリカにおいて、そして世界中でアクチュアルな現象である。そうした動きは、サブカルチャーとしてではなく、社会を変える力を持った対抗文化として捉えなければならない。その意味でも、保守化の時代におけるリベラルな文化の可能性を考える、という本書の問題提起は、現在の人文社会科学が取り組むべき重要な課題なのである。